

一 次の文章は長沼毅『辺境生物はすごい!』の一節です。筆者は長年にわたり辺境（人間にとって「行きにくい環境」であると同時に「生きにくい環境」である、極地や深海や砂漠などのこと）にすむ生物を研究しています。以下の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

※1 チューブワームは、従来の生物観を覆すような「奇妙な動物」として注目されました。しかし深海底のどこにでもいるとなると、それは決して例外的な存在ではありません。これまでの常識に照らせば「奇妙」かもしれませんが、地球全体から見れば、少しも珍しくない「ふつう」の生き物だといえるでしょう。

なにしろ、海は私たちが住んでいる陸地よりもはるかに広いのです。その海底に薄く広く存在するチューブワームの仲間たちは、ある意味でスタンダードな地球生命なのだと考えざるを得ません。

ここで大事なのは、「辺境」は決して「例外」ではないということです。人間にとっては2つの意味で「いきにくい」辺境ですが、そこにも多様な生物が存在します。しかも、地球を見渡せば、辺境のほうが面積も体積も圧倒的に大きいのですから、地球上の生命について考えるなら、辺境生物を無視できるわけがありません。むしろ、そちらにこそ地球生命の本質があるかもしれないのです。

ところが、^① 深海底の生物は研究がしにくい。その理由は、アクセスが難しいことだけではありません。研究者にとっては、もうひとつ厄介な問題があります。それは、ライフサイクルが「遅い」ことです。

たとえばバクテリアのような微生物は細胞分裂によって増殖しますが、そのペースは生きている環境に大きく左右されます。単純な話、エサが豊富な環境のほうが、ライフサイクルは速くなると考えていいでしょう。エサの少ない環境では、ライフサイクルの遅い生き物のほうが生き残りやすいのです。

深海生物でいえば、海底火山の熱水噴出孔周辺はエネルギーや化学物質が豊富なので、生物の増殖や代謝反応などが速くなります。そこで採取したバクテリアは、実験条件をうまく整えれば、^② 1日に1回のペースで分裂してくれるものもある。これは、研究者にとって実ありがたいことです。研究には大量のデータが必要ですから、それが早く集まれば集まるほど効率がいい。1日1回のペースで分裂すれば、サンプルが10日で1024倍になるのですから、成果も早く出せるでしょう。

うが、論文を量産しやすいわけです。

それに対して、海底火山も活断層もない「ふつうの深海底」は、エネルギー源や化学物質がきわめて少ないので、そもそも生物がほとんどいません。3、わずかに存在する生物のライフサイクルが非常に遅い。生きるのに必要な材料が少ないので、ノロノロとゆっくり増えるタイプの生物しか暮らせないのです。

したがって研究者にとっては、ひどく効率が悪い。なかなかデータが増えないので、下手をすれば10年に1本ぐらいしか論文が書けないかもしれません。その意味で、成果を求める研究者にとっても、辺境は「いきにくい」カテゴリーなのです。

ちなみに、最近話題になった深海生物のダイオウグソクムシは、5年間絶食しても生きてるとびっくりされました。なぜそれで生きていくのかのメカニズムはまだわかっていませんが、非常に興味深いことです。砂漠さばくにいるサソリの中にも、1年以上食べなくても生きる種がいるそうです。もしあなたがこれらの生物を研究すると考えたなら、気が遠くなりませんか？

でも、そこに生物がいる以上、誰かがそれを研究すべきでしょう。

もちろん、回転の速い生物は重要な存在です。生命現象の謎なぞを1日も早く解き明かすには、その研究が欠かせません。しかし地球の大半が「辺境」だとすれば、そこに暮らす「遅い生き物」こそが地球生命の主流だと考えることもできる。その研究から得られる知見ちけんも、やはり「生命の謎」を解明する上で不可欠です。

③「ライフ・イン・ザ・スロー・レーン (Life In The Slow Lane)」

私が学生の頃、深海生物のジワーツとした遅い生態を見たアメリカの生物学者が、そんな言葉を掲かげました。ちょうど、イーグルスの「ライフ・イン・ザ・ファースト・レーン (Life In The Fast Lane)」という曲がヒットした頃ころです。

(中略)

その曲名を直訳すれば、「追お越し車線しやせんの人生」となるでしょうか。それに対して、深海生物の多くは「遅い車線」をゆっくりと走っている——と、そのアメリカの学者は見立てたわけです。この「ライフ・イン・ザ・スロー・レーン」という言葉を知ったことも、私が辺境生物に関心を持つきっかけのひとつでした。

追越し車線をビュンビュン走る生物たちから遠く離れた辺境で、ジワジワと自分のペースで進む生物の生き方は、いわば「究極のスロー

ライフ」でしょう。エネルギーも物質も少ない場所で、

X

、それで生き続けることができるなら、別に悪いことはありません。

人間社会でも、競争に勝つために効率を求めて「ファースト・レーン」を走るのに疲つかれて、スローライフに魅力みりょくを感じる人々はたくさんいます。そして、それはもしかしたら動物として「ふつう」のことかもしれません。

自然界の掟おきてというところ、肉 食の過酷かこくな生存競争のようなイメージを抱いだく人も多いでしょう。たしかに、動物はほかの動物や植物を食べないと生きていけないので、「食うか食われるか」の厳しさがあるのは間違まちがいありません。

しかしその一方で、競争相手のほとんど見当たらない辺境で、ガツガツせずにゆっくり生きている生物がいる。さきほど挙げたダイオウグソクムシやサソリのような生き物もいれば、南極の海底には、成長が遅くて1500年以上生きる海綿動物かいめんどうぶつがいて、生物の多い温暖な海に棲すむ海綿動物よりずっと長生きです。チューブワームの仲間たちのように、物を食べず、自分ではエネルギーや栄養を作ることさえせずに、海の底でひっそりと暮らすものもあります。ある種のチューブワームは250年以上生きるとされています。……そんな生き物が地球上には満遍なく存在するのです。

⑤そう考えると、自然界は「早い者勝ち」の生存競争ばかりではありません。競争せずにマイペースなスローライフを送るのもまた、自然界の標準的なスタイルだといえるのではないのでしょうか。

(長沼毅「辺境生物はすごい！」)

(注)

※1 チューブワーム：一九七七年に発見された深海生物。

※2 イーグルス：一九七一年にデビューしたアメリカのロック・バンド。「ライフ・イン・ザ・ファースト・レーン」は一九七六年に発表された。

問1 1 3 に入る言葉として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ たとえば ウ ところで エ しかも

問2 「多様な」について、本文中の語句の意味として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不思議な イ 似たような ウ 対照的な エ 色々な

問3 ①「深海底の生物は研究がしにくい」とありますが、なぜですか。理由として、あてはまらないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 深海底に行くことが難しいから。

イ ライフサイクルが非常に遅いから。

ウ 深海底の生物は飼育することが難しいから。

エ 研究に必要なデータが十分にそろわないから。

問4 ②「そこ」とありますが、「そこ」とはどこですか。本文中から十二字でぬき出し、最初と最後の二字で答えなさい。

問5 ③「ライフ・イン・ザ・スロー・レーン」について、何を「ライフ・イン・ザ・スロー・レーン」にたとえたのですか。本文中から十六字でぬき出し、最初と最後の四字で答えなさい。

問6 X に入るものとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ひどく効率の悪い生活をしているわけですが

イ とても能率的な生活を求めているわけですが

ウ 世にも奇妙な生活をしているわけですが

エ 悠々自適な生活を求めているわけですが

問7 ④「☐肉☐食」について、☐に入る漢字をそれぞれ答えなさい。

問8 ⑤「そう考えると」について、「そう」の指す内容を五十字以内で説明しなさい。

問9 本文の内容について、正しいものには○を、まちがっているものには×を、解答らん書きなさい。

ア 辺境生物は、ライフサイクルが遅いために、ジワジワと自分のペースで長く生き延びられる。

イ 進化の過程で過酷な環境下で生き延びることを選択した辺境生物は、生存競争における勝者といえる。

ウ 競争社会にひどく疲れた人々がスローライフに魅力を感じているのは、動物的直感によるものだ。

エ 辺境は地球の大半を占めており、「究極のスローライフ」も自然界の標準的なスタイルといえる。

「私」は、食料品店を営む一方で会社にも勤めている父と、店を切り盛りする母との、三人で暮らしている。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

日曜日の朝、一人でかけていった父が庭先に帰ってきた。小石一個踏んではいけないのだとばかりに注意深く自転車を押してきたのである。庭にしゃがんで蟻を見ていた私に、父は嬉しくてたまらないのだという様子で声を掛けてきた。

「ようやく望みがかなったぜや。毎日毎日、朝から晩まで、好きなこともしないで正直に働いてるんだから、このくらいよかんべ。我々庶民に足りないものは高尚な趣味だ、なんていつてな」

父は私を見ていつているのだが、本当は六畳間を掃いている母に向かっていつているのである。庭のほうに母が箒を動かすたび、陽の中に埃がふくらんで銀色に光った。距離を置いて、母は父に声を投げた。

「何かやるたびに言い訳するのね。よつぽどやましいことがあるんじゃないの」

「家族が増えるんだから、それはやましいわなあ」

父は自転車の荷台に四角形の白っぽい籠をしばってきた。籠の中では何かが動いている。私は空に向かって頭を突きいれるようにして地面から立った。いつの間にか夏が過ぎていき、濃い緑色に燃え立っていたような庭の草も勢いをなくしていた。地面を歩きまわる蟻の数もめっきり少なくなった。

「夢だったんだ。子供の頃からの」

今度は父は私に向かっていつたのだ。私は荷台の籠のほうに歩いていつた。動いている黒い影から生きもののにおいがした。父はスタンドをていねいに立てて自転車を安定させた。庭には雑草が繁っていたが、縁側の前の部分や井戸に向かう道は黒く湿った土が露出し固まっていた。草と土の部分をもたぐうようにして四本の杭が立てられ、その上に鳩小屋がつくられていた。会社から帰った父が何度も深夜まで作業してこしらえた鳩小屋だった。トラップも皿果も餌箱も給水器も揃っていて、ないのは鳩だけだったのである。

「①お前は大人になってもきつと今日のことは覚えていいるぞ。俺ぐらいの年になったら鳩を飼いたいと思うかもしれないぞ」

父の声は歌っているかのようなだった。父はゴム紐を解いて荷台からはずした籠を、いかに②も大切に両腕で持った。鳩小屋の横には踏み台のりんご箱が置いてあった。そこに立って入口を開けると、鳩小屋の内部に手をいれて作業するのちようどよい高さになった。父は取手のついた籠を鳩小屋の中にいれてから、蓋を開いたのだ。それから父は手を引っ込め、鳩小屋の戸をA閉めた。

父は私を抱き上げて鳩小屋の中を見せてくれた。籠の中でB首を突き上げていたのは二羽の鳩だった。用心深くあたりを窺っていた鳩のうちまず一羽が羽撃いて止まり木に上がった。間を置いてもう一羽も上がる。二羽はC首を右に左に動かした。つられて私も小屋の内部を見まわす。金網は父が針金を編んでこしらえたので、目が揃ってはいなかった。外からはいれても中からはでられない装置のトラップも、太い針金を材料にした父の手製である。

「きれいなね。鳩ってこんなにきれいだっただかしら」

いつの間にか庭に降りてきた母が溜息まじりにいつた。黒と灰色の羽は艶やかで、動くたびに光を撒き散らした。一番光っているのは瞳である。内部から発光しているような瞳は、外側からの光に機敏に反応していた。二個の生きものがはいつただけで、それまでがらんとした箱にすぎなかった鳩小屋は、D精彩を放ってきた。

「若鳥だから、新しい鳩舎に慣れるのも早いぞ。大体若いほうがきれいだからな」

「くちばしの上に小さな瘤が二つ乗っているのね。可愛いわ」

「鳩の会にはいつて友達に分けてもらつたんだ。くちばしが黒くて艶があるだろう。頭はおでこでさ、まあくて広いだろう。これがいつていつたら、誉められたぜや。Eが高いって」

父は鳩のほうに目をやったままいつた。父が話すたび、声の響きが胸越しに伝わってくる。小刻みな動作をやめようとしないう鳩から、私も目を離せなくなっていた。

「番でしよう。卵を産むわね」

「たぶんな」

「番じゃないの」

「わからないんだよ。どっちが雄で、どっちが雌か」

「目の感じだけでしか見分けられないっていうんだぜや。雄は眼光が鋭（さくど）くてきつい感じで、雌はやさしいっていうんだけどな。人間だってそうとは限らねえもんな。どうも先入観のような気がしてよ」

私を抱く腕が疲れたのか、父は右腕と左腕とを持ち換えた。先に父がいておいた玉蜀黍を鳩はついばみはじめていた。落ち着かない小刻みな動作が減ってきた。母は鳩小屋に視線を注いだまま動かない。

「よく見ろよ。一羽は目がやさしそうだろう」

「そういわれりやそうだけどさ。そのうちわかるべ」

「卵を産むといいわねえ」

「まさか、お前、店で売っていうんじゃないかなあ」

「まさか」

こういつて母は鳩小屋から遠ざかつていった。父は胸から息を抜くと、私を地面に降ろした。空がすうつと広くなる感じがあつた。りんご箱に立った父が鳩小屋に腕をいれても、鳩は騒がなかつた。父は給水器を取りだした。台をつくつて逆様^{さかさま}に立てた一升壇^{しよびん}の口を、水を満たした鉢^{はち}にあてる。一升壇に水はたまっているのだが、鉢の水がなくならないかぎり壇の水はこぼれない。鉢の水がなくなればなくなった分だけ一升壇から補充^{ほじゅう}されるのである。不安定なよう^アに見えたが、水は不思議なバランスを保っていた。

「三日前の水だったぜや。腐くさつてたら大変だかなあ」

一升壇の給水器を両手で持った父は、地面に近いところに立つ私にいうと、庭の端の井戸に向かって歩きだした。コンクリートの流し場にいた五、六羽の雀が小石を投げたように飛んだ。私は父の後に従っていく。歩きながら父は一升壇の水を草に捨てていった。その水が光った。ロープをたぐり赤錆びた鉄の滑車を鳴らして父は水を汲んだ。新鮮な水のおいがあたりにひろがる。私は一人で井戸に近づくことを禁止されていた。井戸はいつでも子供を呑み込もうと口を開けて狙っているのだと母はいう。立てた一升壇の口に向かって、父は手桶の水を少

しずつこぼした。塙の中にはいるよりもこぼれる水のほうが多い。まるで塙を洗っているかのようである。

私は井戸のコンクリート枠に取りつき、中を覗いた。背伸びをする必要もなく腰を引く必要もなく、私の背丈は井戸を覗き込むのにちょうどよかった。遙か闇の遠くで銀色の光が揺れていた。それはまるで大きな鳩の目のようだった。私は鳩の目に向かって手を伸ばそうとする。瞳の光は吸い込むように私を呼んでいた。

その時、私の身体はふわりと浮かんだ。鳩の瞳に向かつて頭が傾いたかと思うと、井戸の上を越えて反対側にいった。知らず識らずのうちに私は横にひろげた腕をばたつかせていた。そのまま私は草の庭の上を飛んでいったのだ。

「どうだ、鳩になつた気分は。気持ちいいだらう」

私の身体を両腕で支えて走りながら、父ははしやいだ声をだした。⑥ つばさ なおも私は腕の翼を羽撃かせる。私は鳩小屋に向かつて飛んでいった。かと思うと、途中から戻る。家のほうにいき、縁側の手前で引き返すかと思つたら、今度は家の中にはいつていった。縁側から畳の縁に射す陽光の中を私は何度も通る。

「鳥影だ。とりかげ 家の中に鳥影が走ると縁起えんぎがいいぞお」

父は叫^{さけ}んでは六畳間を走りまわる。腕を開いた私の鳥影は、陽に照らされた畳と縁側とを横切つては影にまじる。店から二^{ふた}つの顔が窺^{のぞ}いた。母と工務店の奥^{おく}さんだ。母の口が私をたたき落とすような感じで大きく開かれる。

「大人のくせに浮かれてる。やめなさいよ、いくら楽しいことがあったからって」

母の聲に追い立てられ、父と私とは再び庭に降りていった。

問1 ― A「高尚な」、B「やましい」の意味を次から選び、記号で答えなさい。

A「高尚な」 ア 人氣があり手軽な イ つつましく安価な

ウ 品性が高く立派な エ 高価でぜいたくな

B「やましい」 ア やむをえない イ うしろめたい

ウ 気がかりな エ あさましい

問2 ― ①「お前は大人になってもきつと今日のことは覚えているぞ」とありますが、「父」にとって鳩が特別な存在だということが分かる表現を、「父」の言葉から漢字二字でぬき出して答えなさい。

問3 ― ②「いかにも大切そうに両腕で持った」と同じように、「父」が鳩を大切に扱っている様子を表している文を――②より前から二つぬき出し、それぞれ始めの四字で答えなさい。

問4 A D に入る語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 恐る恐る イ 急に ウ たえず エ そつと

問5 ― ③について、「母」が「溜息まじりにいった」のはどのような気持ちからですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父が何の役にも立たない鳩を連れてきたので、あきれれる気持ち。

イ 父が商売になりそうな鳩の番^{つかい}を連れてきたので、期待する気持ち。

ウ 父がとうとう鳩を連れてきてしまったので、あきらめる気持ち。

エ 父が連れてきた鳩が思いのほかきれいだったので、感嘆する気持ち。

問6 E に体に関する漢字一字を入れて、慣用句を完成させなさい。

問7 本文中の~~~~アーエのうち、働きが異なるものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不安定なように イ 小石を投げたように

ウ 洗っているかのようである エ 吸い込むように

問8 ― ④「井戸はいつでも子どもを呑み込もうと口を開けて狙っているのだ」に用いられている表現技法を次から選び、記号で答えなさい。

ア 直喩法 イ 倒置法 ウ 体言止め エ 擬人法

問9 ― ⑤「私の身体はふわりと浮かんだ」とありますが、これはどのような様子を表していますか。二十五字以内で説明しなさい。

問10 ― ⑥「なお私は腕の翼を羽撃させる」とありますが、「私」はどのような気持ちからこのような行動をしていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父のはしゃいだ様子を見るのは楽しいが、これがいつまで続くのだろうと不安になる気持ち。

イ 父のはしゃいだ様子に逆らうのは父にかわいそうなので、楽しいふりをしようとする気持ち。

ウ 父のはしゃいだ様子に乗って自分も空を飛んでいるような感覚になり、一緒に楽しむ気持ち。

エ 父のはしゃいだ様子に対して、もっと冷静にならないと母に叱られると心配になる気持ち。

問11 ― ⑦「母の声」とありますが、「母」はどのような気持ちで言っていると考えられますか。本文を参考にして六十字以内で答えなさい。

次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

- ① シンマイの収穫しゅうかく
- ② 畑をタガやす
- ③ サイフを拾う
- ④ 木の切りカブにすわる
- ⑤ 皿に料理をモる
- ⑥ 蚕のさなぎ
- ⑦ 規則を守る
- ⑧ 応急処置をする
- ⑨ ていねいに謝る
- ⑩ 雑誌の表紙

「このページに問題はありません」

